"アグリサービスの果てなき追及"
THE MAC JOURNAL
三菱商事アグリサービス
vol.656

◆2024年4月10日発行ラインナップ◆
・「土」についての話題
・未来の農業を訪ねて

「土」についての話題

3月9日　日本農業新聞に以下の論説が掲載された。
時代は医食“農”源　健康な土を地域の宝に　（以下抜粋）
「地球と人の健康はつながっている――。そんな考え方が出てきた。健康な土をつくることで気候変動や病気に強い作物が育ち、それを食べた人の腸内細菌が健全になり、地球環境も良くなる。鍵を握るのが土の中の微生物だ。時代は医食同源から医食“農”源へ。土づくりを見直そう。　医療技術が進む一方、がんをはじめ生活習慣病、アレルギー疾患、うつなどの病気は減らず、食を通した病気にならない健康な体づくりが求められている。土と人間、地球の健康はつながっており、全体を俯瞰（ふかん）して最適にする、こうした考え方を「プラネタリーヘルス」という。（中略）
有機物の投入によって、多様な微生物が生きられる豊かな土ができ、その土でできた作物を食べた人の腸が元気になり、健康づくりに貢献する。豊かな土が農村の宝となり、その土を求めて都会から人がやってくる――。そんな好循環を生み出したい。（中略）
高齢化が進み、医療費が増大する中で、国民の健康は日本の土が支える。そんな機運を盛り上げよう。」

また、NHKヒューマニエンス「“土”生命の星の小宇宙」では「土壌微生物」「団粒構造」「不耕起栽培」が取り上げられており、「土」にスポットライトを当てている。
農業に関わっていない方は「土」には無縁な日常を過ごしていると思うが、このように「土」に関心が集まるのは喜ばしい。水耕栽培を否定はしないが、やはり「身土不二」。「土」の健康状態が悪いと人の「身体」にも悪影響が及ぶと解釈したい。（もともと仏教用語であり、「因果応報」と同義で使われている。）
NHKの放送では「耕起栽培」を否定するものではない。過度な「耕起」により土壌微生物の種類や絶対数が減り、団粒構造も壊れ「土」が悪くなるということが判明してきたとの内容。適度な「耕起」により微生物の共生関係のバランスや「団粒構造」の破壊を守るということだ。過度な施肥も「土」には同様の害を及ぼす。適した施肥量と作物に適した成分バランスの肥料使用が求められる。しっかりした「土」作りが基本であり、有機ならば何でも良いということではなく、良質な「堆肥」の適正施用が求められる。また「堆肥」だけでなくケイ酸質資材等の「土壌改良材」の施肥は「猛暑」対策としても推奨されている。
昨今は農業収入が割に合わず、安い堆肥や肥料が求められ、且つ土壌改良材の施肥が省かれる傾向が強くなってきている。いったん壊れた「不健康な土」を「健康な土」に戻すことは大変な時間と労力を要する。
「健康な土」は生産者の「財産」であり、我々国民の「健康」を守る大切な「宝」であることを忘れてはいけない。

～未来の農業を訪ねて～

新規事業開発室では未来の農業の形を求めて農業生産者の皆様と様々な取り組みを進めています。

今回は北海道美瑛町で米生産を営まれている生産者様との「環境に配慮した持続可能な農業生産手法としてのオーガニック米（有機JAS米）」の取り組みをご紹介致します。

この生産者様とはじめてお会いしたのは2021年の2月でした。まだ、美瑛町は冬の真っただ中で新型コロナが猛威を振るっている状況でしたが、今後求められる農産物について会話したことを覚えています。その時お聞きした印象的な言葉が「多くの人が手に取れるオーガニック農産物」、そして「ワクワクする農業」でした。これは今もプロジェクトのベースになっています。

生産者様はお子様が食物アレルギーのため以前より特別栽培米に力を入れていましたが、オーガニック農産物は生産性に課題があり経営に乗せるにはハードルが高いと考えられていました。無理かと思われたその時、オーガニック農産物をより手ごろに生産する方法案の提案があり少々勢いに押され気味ではありましたがスタートしたのが美瑛オーガニック米プロジェクトでした。

2023年6月下旬：除草作業中のオーガニック田

2021年2月に初めてお会いして5月にはすぐに作付けをするというスケジュールになり、今思えばプロジェクト参加者皆様の思いが先行したかなり挑戦的な計画です。プロジェクトメンバーは農業に関わる多くの組織の皆様が参加しており、既存のオーガニック生産手法とは異なるアプローチからの取り組みのため心強い仲間たちが集いました。

プロジェクト初年度の田植えは2021年5月20日前後を見込み、オーガニック対応の育苗を開始。営利栽培用の育苗に失敗は許されないのですが、そうそう順調に行くわけではなく苗が期日までに仕上がらないという現状です。何とか田植えは出来ましたが、前評判通りほとんど生育してきません。周囲の田んぼは青々と繁っているのに、我オーガニック田は苗がポツンポツン、田植え後1か月間ほとんど生育していないのではないのかという惨状。そろそろ周囲の田んぼに走り穂が見え始めるころ、ようやく分げつしてくる状態です。病害虫の防除、除草も計画通りに進みません。メンバー皆さんが専門分野を駆使して対処を進めましたがあまりに独特な生育パターンに不安満載です。なんとか稲刈りまでたどり着き刈り取ってみるとなんと9俵を超えた収量となっていました。もう異例づくしのシーズンでした。

それから3年を過ぎ2023年は有機JAS仕様の生産が出来るようになり、プロジェクトは有機JAS生産にとどまらない環境に配慮した持続可能な農業手法の確立に進んでいます。この話題はまた後編で。

紙面をお借りしまして取材させていただきました美瑛オーガニック米の生産者様、プロジェクトメンバーの皆様に御礼を申し上げます。（新規事業開発室）

新年度スタートしました。どんな一年になるかワクワクしております。

編集事務局：田口、山内
電話：03－5275－5511／E-mail：macjournal@mcagri.co.jp　　URL　http://www.mcagri.jp